

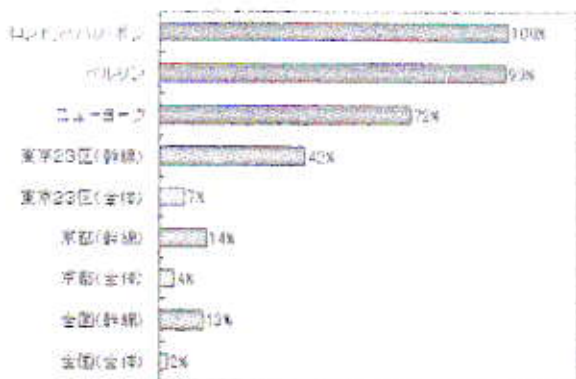
まちなみ通信 **みのお**

発行：NPO みのお市民まちなみ会議 第52号 2014年7月

電柱のない街 考えてみましょう

大町 凱彦

先日テレビを見ていると、外国人が日本で不思議に思う風景で、電柱の林立する街並み風景を上げていた。特にヨーロッパから来日した人は驚くそうだ。多くの日本人も欧米諸国を旅する機会が多いが、一部の方を除いて殆どの方は気が付いていない。パリやロンドンの街で電柱を見た人は居ないだろう。欧州の街は古くから電線などは地中配管によって送電されているので、街中では送電線は目に触れない、まして電柱も全く無い。アメリカも日本より遥かに地中化率は高い。我が国の東京都でも足元にも及ばない。



※1 海外の都市は電気事業調査協会の調査による1977年の状況(ケーブル延長ベース)
 ※2 日本の状況は国土交通省調べによる2008年7月現在(延長延長ベース)
 ※3 幹線(幹線道路)：市街地の一般道路、都道府県道
 全体：市街地の道路

【欧米主要都市と日本の都市の地中化の現状】

を法律で義務付けた。19世紀末のマンハッタン(ニューヨーク)では架空電線が蜘蛛の巣の様に張り巡らされていた。当時は被覆技術が無く裸線であった為、感電事故が多発したので行政が主導して地中化が行われた。

一方、我が国では欧米より若干時期が遅れたため、電線に被覆も施され感電事故も少なく地中化は考えられなかった。むしろ安価に電力を供給することが強く求められ。関東大震災、第二次大戦後にも電力供給力の早急な回復、街の復興が優先した。

私たち日本人は、生まれたときから電柱の在る生活をしている為、電柱や電線が空を遮

っていても、当たり前風景として捉え、街並みに違和感を感じる人は非常に少ない。また欧米などの都市を訪れても、電柱や電線の無い街並みに特別に関心を示さない。多くの人々は電柱の存在に意識が働かない。現に箕面市内でも、市役所前のアドプトロード、萱野中央の新御堂筋、箕面駅からの滝道、小野原 5 の住宅街(一部)、森町北 1, 2 の住宅街を歩いても、よほど関心のある人以外、気が付かないのが実態です。



小野原東5の住宅街

昭和44年新都市計画法が施行され、全国的に都市計画の総合的な見直しが行われた。道路、公園、用途地区の分別などにより、街の整備が進むと、景観の視点から無電柱化が問題となった。しかし、景観を唱えるのは行政や専門家、企業、景観保全などに関心のある市民や団体などで、多くの人々への拡がりは無かった。平成7年(1995)の阪神大震災で、電柱が倒れ、電線が切れ被災者の避難に支障を来した。それどころか消防車、救急車の通行の妨げとなり、災害を増幅させたと指摘された(被災率は地下埋設の1/80とのデータもある)。それ以来景観面だけでなく防災の面からも、無電柱化がクローズアップした。

無電柱化の方策には、①電線を地中配管に移し電柱を無くす、②表通りの電柱類を、裏通りに移す方法(裏配線)、裏通りは多くが私有地の為、電柱を建てるスペースが確保されにくいので、家々の軒下、軒先などに配線(軒下配線)するケースも在る。

欧米に後れを取った日本での無電柱化の動きはどうだったのだろうか。箕面の桜井(明治44)、大正住宅博(大正11)、箕面、百楽荘(大正14)など先進的で現代にも誇れる街並みが造られたが、無電柱化は行われなかった。



芦屋市六龍荘の住宅街

我が国の無電柱化第一号は、昭和3年(1928)芦屋市六龍荘町の住宅開発で、日本有数の高級住宅街として、景観を重視した街づくりが行われた。前述のように、日本の電気事業は、欧米に若干遅れて始まったため、電線の被覆技術が進展し、感電などの危険性が少なく、安価な電力の供給が優先され、地中化は見送られた。現状では、電力会社も無電柱化のメリットは少ないので、費用負担を求めにくい。

国交省を中心に推進してきたが、道路予算に比して規模が小さい。その為重点箇所として①市街地の幹線道路。②県庁所在地間を結ぶ緊急輸送道路。③バリアフリー化すべき道路や通学路。④歴史的街並みの保全などが特に必要な地区。⑤伝統的祭り等の地域文化の復興や観光振興に資する箇所などを掲げている。

日本の道路は欧米の近代街路幅員最低10mに比して、一般に幅員が最低4mと狭い。無

電柱化は、この狭い道路を有効化する効用があるが、工事期間が通行の障害となる。無電柱化は、単に電線を地中配管で埋めるだけで、トランス(変圧器)、分電盤、遮断機(スイッチ)などは、地中に埋設できない。従ってこれらを設置する場所が必要となる。歩道などの在る道路では設置場所にあまり問題が無いが、両側に店舗などが続く狭い商店街では、設置場所の確保が難しい。



歩道の変圧器、遮断機

この様な諸懸念を内包している為、地中化の発注数も少なく専門工事会社も少なく、会社規模も小さい。作業の効率化もなかなか進展しなかった。かつて1kmあたり10億の工事費を要すると云われ、無電柱化の大きなネックになっていた。徐々に低廉化し1kmあたり3.5億まで下がっているが、まだまだ高額である。

芦屋市六麓荘町の住宅開発以降、無電柱化が行われた例は、①市街地の幹線道路では、大阪府交野市「コモンシティー星丘」、尼崎市駅前開発(緑遊新都市)、三田市「カルチャータウン」(ワシントン村、兵庫村)、箕面市アドプトロード(府道43号)、萱野中央付近(新御堂筋)など、④歴史的街並み保全の例では、橿原市今井町、枚方市枚方宿、長野県東御

市海野宿、福島県下郷町大内宿など殆どが「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されている。⑤地域文化の復興や観光振興では、神戸市トアロード北野地区、京都市花見小路、埼玉県川越市蔵造りの町、伊勢市おはらい町、箕面市の滝道などがある。

最近、政府・自民党は東京オリンピックを見据えて、景観や防災機能の改善を図るため、「無電柱化基本法(仮称)」を議員立法で成立を目指す考えが新聞各紙で報ぜられた。全国に約3500万本ある電柱を減らし、年間7万本も増加する



川越市蔵造りの街

のを抑制するため、電柱の新設を規制する。道路管理者の国や自治体は、電線を地下に埋設する工事のみ認め、道路の新設、拡幅、歩道の設置、住宅地の開発時に電柱の新設を原則禁止することを検討している。問題は電柱送電で1kmあたり1~2千万なのに対して、前述のように非常に高額である。

国交省では8千万/km程度に下がると試算しているそうだが、年間7万本分の地中化には、相当な財源を要する。一方、電線の埋設では、変圧器や遮断機などは地上に設置しなければならない(前述)ので、この費用の負担が電力会社に発生する。(結果的に消費者負担に繋がる)

ところで、電線の地中化のメリットは、既に述べたが、景観の改善となる。特に歴史的街並みでは、観光客などが増加し、地域経済の活性化を促している。また住宅街では資産価値が向上すると云われている。また、強風や地震による断線、電柱の倒壊など、災害危

険が改善される。狭い道路では歩行者は勿論、乳母車や車椅子使用者など、交通弱者にとってバリアフリー化に繋がる。

その一方で、デメリット、懸念されることは、①傷んだ電線などを事前に目視発見出来るが(専門職ではあるが)、地中化で破損箇所の特定が困難となり、復旧が遅れる。②地震などで地下施設が破損した場合、破損箇所の特定に手間取り、復旧が大幅に遅れる。(阪神大震災では、地中線の復旧に倍以上の時間を要した)③道路下の配線なので、冠水・積雪時には修理復旧が困難である。④電線が空中から無くなるため、避雷線が無くなり、沿線への建物、通行人への落雷危険度が増す。

そして、予想外に電柱に依存している⑤交通標識、交通信号、カーブミラー、防犯対策の街灯、防犯カメラ、防災無線、箕面市では見られない津波対策の標高表示、河川氾濫時の水位表示、避難場所誘導標識、逆に他市に較べて完備している住所表示。その他有線放送、避雷針、景観上議論が分かれるが電柱広告、各種催し物、お知らせの為の横断幕など新たな設備を考えねばならなくなる。これが意外に難しい。(現に六麓荘、川越市、箕面市でも街灯、道路標識、カーブミラーなどが設置されている)

その他、経費的に安価な裏配線、軒下配線を行った場合、私有財産の中に設置するケースが多い。売却、相続などで所有権が移動して、新たな所有者が継続設置を拒否すれば、たちまち配電が出来なくなる。

以上、テレビ番組を見て電柱のない街について思い、いろいろと調べると、景観の改善から始まった無電柱化の歴史、欧米との違い、我が国の現状と問題点など、だんだん深みにはまった。生活様式の変化、かつて多世代で暮らす生活が、都会地では一世代住宅になりつつあり、過疎地だけでなく高齢化、一人暮らしの家が増加しつつあります。このような状況下で、近年戸建住宅地域や古い集合住宅街が、大規模なマンションに更新したりしている。折角、高額のコストをかけて電線の地中化を図っても、道路そのものが付け替えられたりすることも予想される。将来の人口動態を考慮した都市計画の確立、道路建設が根本の問題だと判った。結果的に多方面にわたって配慮する非常に難しい問題です。みなさまは如何お考えでしょう。

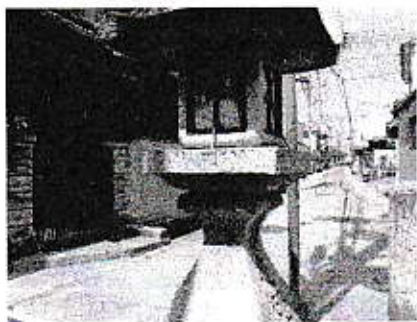
でも、進めなければならない課題です。



市役所前のアドプトロード

豊川南小学校は、平成26年（2014年）開校36年目を迎えました。箕面市内の小学校として、中小学校とともに11番目に開校いたしました。当時は、ほとんどが竹藪や田畑で緑が豊かに残るのどかな学校でもありました。また、開校当時は、児童玄関にもしょっちゅうマムシが出て、児童がかまれる！といったことも何度かありました。もちろん、開校当時は東小学校から分離独立したこともあり、全校児童241名という小規模校でのスタートでした。

ところが、今や開発が進み市内でも有数の「おしゃれな街」に生まれ変わりつつあります。また、児童数も市内最大校として900名を超すマンモス校でもあります。しかし、その一方で今でも旧西国街道の風情が数多く残されているところも、特に学校の北側にはあります。ご存知のように、この西国街道は京都・東寺から西は西宮まで続く江戸時代からの要衝の街道でもありました。すぐ西側に行けば、赤穂浪士で有名な萱野三平の旧宅があることは、多くの方がご存知だと思います。



本校の郷土学習でも、地域の歴史を学ぶ3年生から4年生の社会の学習を中心に、校区に残る様々な歴史的遺産・文化財を学んでおります。

春日神社や常夜灯、春日神社の御旅所、江戸時代からの雰囲気は今にも伝える旧家など、本当に数多く残っていることは、この校区に住む子どもたちにとっては貴重な財産でもありと考えております。日頃から、特に幼少期にそういった文化遺産などに見て触れることができることは、子どもたちの豊かな感性を育てていくことにつながりますから。

実際、子ども達も郷土学習などで旧家の蔵や神社など訪ねた時、子どもたちの感想を読ませてもらうと、ちょっとした感動を感じているようです。

そういったことから、今後とも校区の歴史的遺産・文化財をいつまでも大切にしていける気持ちや郷土を愛する気持ちを子どもたちにしっかり伝えていくことは、学校の務めであると感じています。



(校長 六車 徹)